

外国ルーツの高校生支援事業

To inspire differences for all youths



2021年9月9日 東京学芸大学 文部科学省委託事業

「高等学校における日本語指導体制整備事業」2021

企画開発会議調査部会 第4回ヒアリング資料 認定特定非営利活動法人カタリバ

KATARIBA

Shape the Future

本日の流れ

1. 団体概要・事業概要
2. 飛鳥高校定時制学校における取り組み

1. 団体概要・事業概要

認定NPO法人カタリバとは

カタリバは、日本全国で活動する、創業20年目の教育NPOです。

ビジョン

どんな環境に生まれ育っても、未来をつくりだす力を育める社会

ミッション

意欲と創造性をすべての10代へ

アクション

子どもたちに「サードプレイス(自分で選択した居場所)」と「サードリレーションシップ(ナナメの関係)」を届ける

First

家／親と子ども



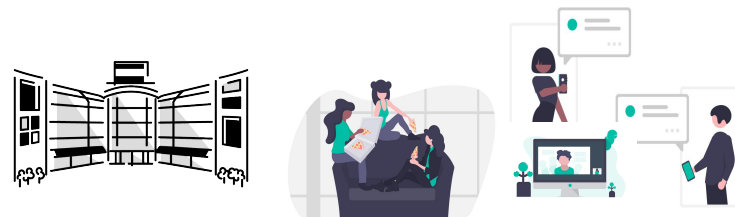
Second

学校／先生と児童生徒



Third

自分で選択した居場所／ナナメの関係



サードリレーションシップ・ナナメの関係タテ(親・先生)でもココ(同世代の友人)でもない、新たな視点を与える一歩先ゆく先輩

活動内容

カタリバは、子どもたちの心に火を灯すプロフェッショナルとして、意欲と創造性を育むことを妨げるあらゆる課題(困難な環境・意欲を育むきっかけ不足・災害など)の解決を目指し、全国各地の現場とオンラインで活動しています。

意欲を引き出すきっかけに
出会えていない

探究学習事業

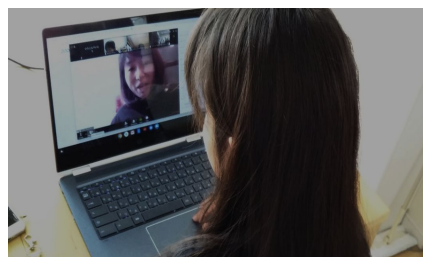
10代の日常を探究に



学校に行けず
自信を持ってない

不登校支援事業

自走する力を育む



自分ではどうすることもできない
困難な環境に置かれている

困窮世帯向け支援事業

逆境から未来をつくる



災害によって突然
日常を奪われた

災害時子ども支援事業

災害の悲しみを強さへ



生まれ育った環境に関わらず、すべての子どもたちに
「サードプレイス(自分で選択した居場所)」と
「サードリレーションシップ(ナナメの関係)」を届ける

国籍や生い立ちが格差につながるのではなく
「違いが豊かさとなる未来」を目指して活動しています。

日本語指導が必要な高校生は全国に4000人以上おり、その人数はこの10年で約2.7倍に増加しています。「Rootsプロジェクト」では、孤立しがちな外国ルーツの生徒をはじめとする困難を抱える高校生が、経験を強さに変え、自分と社会の可能性を拡げていけるよう、学校や行政と連携しながら持続的な支援体制の構築に向け取り組んでいます。



高校の授業時間や放課後の時間を通して包括的な支援を届けます。



In school

Building cooperation
with schools

学校連携

多文化共生カリキュ
ラムの実施



Out of school

Providing online student
consultation and mentorship
program

オンライン
プログラム

生徒伴走と多様な学び
の機会提供

現在の利用者数(都立高校定時制課程に通う生徒中心)

約150名

海外ルーツ:100名

日本ルーツ:50名

<海外ルーツの高校生の接点内訳>

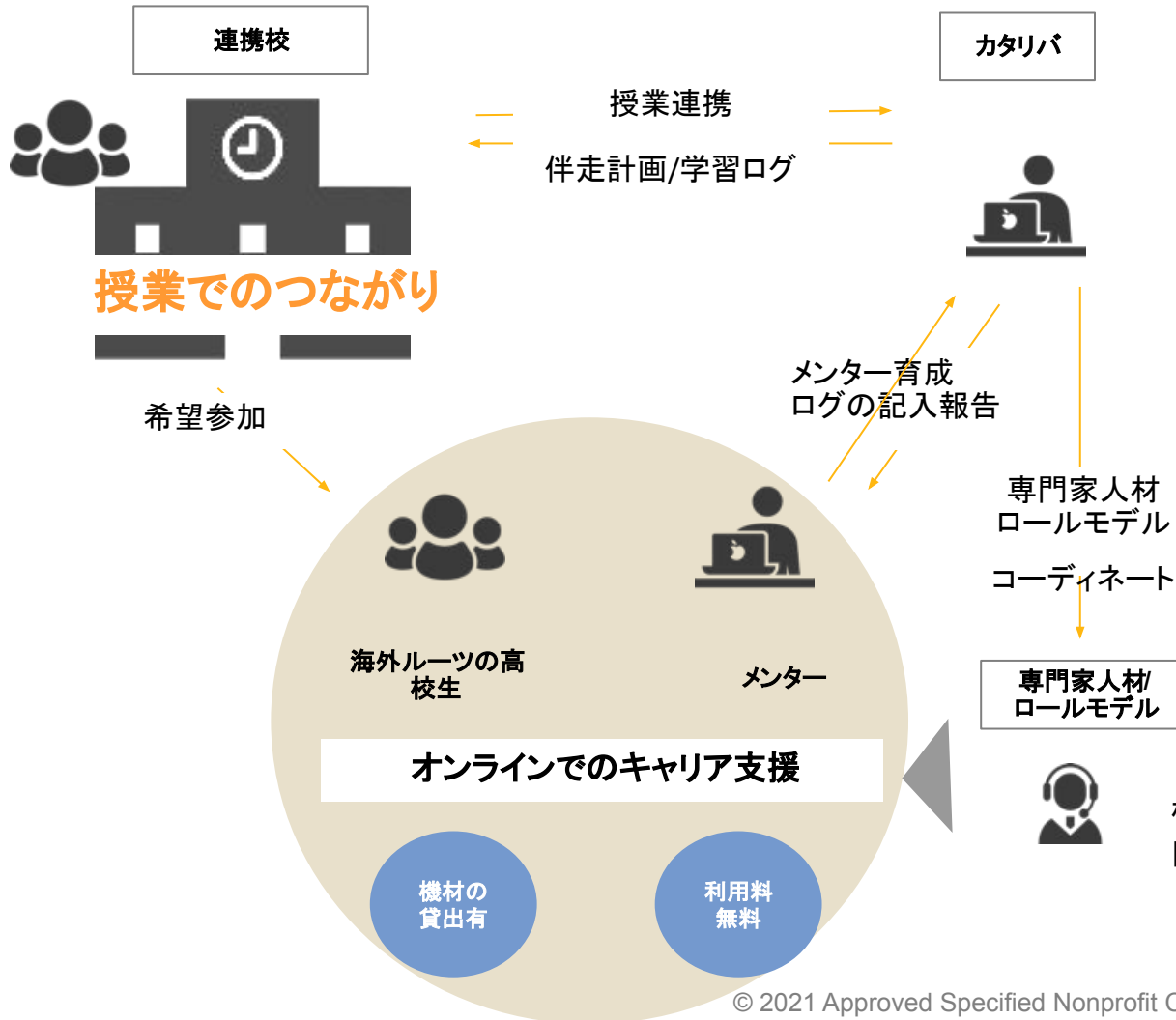
- ・学校のみ:44名
- ・学校+オンライン:20名
- ・オンラインのみ(現役/未就学):22名
- ・オンラインのみ(既卒):14名

2. 飛鳥高校定時制との授業連携

①授業を中心にした居場所

■6～16回(1回2コマ)/年の授業連携

■個別ニーズをオンラインにてサポート (週 1回60分程度) → 学校への情報提供と連携



日本語教師、弁護士や福祉など
様々な分野の専門家
同じルーツを持つ先輩等につながります。

生徒が自分の持っている強みがなぜ日本社会で発揮できないのかという背景を理解することが、伴走のスタートになる

<20年度>

<21年度>

方向性

「できていないことに対して取り組む」
(欠如モデル)

「自分に必要なことを、足していく」
(有効モデル)

仮説

支援へのアクセシビリティが高まれば、
生徒のギャップを補う事ができる

生徒が自分を知ることから始める
(伴走者が生徒の目線から支援を考える)

実施した
こと

「日本で暮らすために、必要なことは？」(他人事)
● 既存のシステムで必要なこと
● 現状＝足りない存在

「日本で暮らす上で、どう在りたいのか？」(自分事)
● そのための日本語
● そのための生活相談
● そのための進学情報

生徒の様
子

● 日本語学習が続かない
● 生活や進路で何が困っているのかが認知出来ていない、解決へのモチベーション低

● 出席率改善、遅刻減
● 生徒発信の悩み相談
● 利用者数増

多様な文化や背景と歴史、そしてマイノリティ／マジョリティの関係性が問われる環境で、生徒やその保護者が持つ文化を教育現場で能動的に取り扱う学校とカリキュラムづくりのモデルとして、文化レスポンスカリキュラム(Culturally Responsive Curriculum)の考え方を学校とオンラインでの取り組みで取り入れています。

1

生徒の「欠如モデル」から「有効モデル」への変換

生徒が「出来ていない」ことから、「出来ることから積み重ねる」への意識の変換をし、多様な表現方法や学びへの参画・取り組む方法を実践出来るような場をつくる

2

「自分の居場所」が見つかる授業・環境づくり

「自分」や「自分の文化」が学校のカリキュラム、クラスルームの中、学校行事、学びの場などに反映され、自身が学校の環境に存在し、関連性を創ることが出来るように工夫する

3

社交性と情動の重視(Social-emotional learning)

生徒の感情や心理的状态が学業や生活にどのような影響を及ぼしているのか、ということを教員や支援者が重視し、また生徒が自身の心理的状态を知ることや、どの様に対応するのかを理解出来るように推進する

生まれ育った環境に関わらず、すべての子どもたちに
「サードプレイス(自分で選択した居場所)」と
「サードリレーションシップ(ナナメの関係)」を届ける



「人」自身が「場」になる



学校現場において

- 1. クラスメイトと先生を起点に**
- 2. 多様な選択肢(人)と出会える環境を**